

往還二廻向論の源流を求めて

近年刊行された『大乘莊嚴經論』第XVII章の和訳と注解

― 供養・師事・無量とくに悲無量 ― の紹介のために

小 谷 信 千 代

近年（平成二十五年）龍谷大学仏教文化研究叢書の一冊として『大乘莊嚴經論』第十七「供養・師事・無量」の章（漢訳の第十八供養・第十九親近・第二十梵住の三品に相当）を和訳し注解した業績が出版された。当『佛教学セミナー』編集部より書評の依頼を受けたものの、『大乘莊嚴經論』の研究より遠ざかって久しく、批評し得るだけの十分な準備も整っていない。お断りすべきが本来かと思ったが、附論として収められた二編の論文が本書の内容を極めて興味深く紹介するものであり、それに導かれて和訳と注解を読み進めるうちに、批評はできずとも本書が仏教学のみならず真宗学の研究をも資益する勝れた業績であることを紹介するだけでも意義あることと、甚だ無謀無責任なことを思いついて依頼をお引き受けしたことである。読者諸賢と本書の執筆者各位には失礼を前以てお詫び申し上げる次第である。

本論の研究については、既に京都大学名誉教授である故長尾雅人先生の『大乘莊嚴經論』和訳と注解―長尾雅人研究ノート―が四分冊で出版されている。龍谷大学では長尾先生が非常勤講師として本論を講義されたことをきっかけとして、先生を囲む『大乘莊嚴經論』の研究会が発足した。その研究会で先生の遺された和訳と注解に依りつつ独

自の翻訳と注解とを加えて研究を刊行することが企画され、二〇〇九年に『大乘莊嚴經論』和訳と注解―大乘の確立―」が出版され、本書は研究会としては第二回目の刊行業績である。

本論第十七章が研究会で取り上げられ「四無量」中第二十九偈以下の「悲の弁別」から解説が始められた理由を、早島理教授は「あとがき」に長尾先生が「晩年大切に読まれたこのテーマを研究会も継承したからに他ならない」と述べておられる。教授のこのお言葉に本書の特性と美質の所以が窺われる。筆者が附論に収められた二論文に興味を惹かれたのも、その論文の一つが、先生がご自身の強い関心事であった四無量中の悲無量を簡潔に述べられたものであり、他の一編が先生のその論旨をよく理解し、本論第十七章の文脈を巧みに追って菩薩行における悲と慈の意味を明確にするものだったからに外ならない。この二論文については後に詳しく紹介することとして、先ずは本書の構成に簡単に目を通しておきたい。

「はしがき」では、能任正頭教授によつて、本書の編集責任者の立場から本書刊行の趣旨と刊行するための研究会における役割分担等が説明されている。上記の筆者の興味からすれば、長尾先生の「大悲」へのご関心が、曇鸞の往相・還相の二種廻向の概念を「向上・向下の概念に読み替えインドの文脈にさかのぼらせることによつて、智慧と慈悲を双輪として涅槃に向かう仏教の基本構造を明らかに」しようとするお考えに基づくものであることが述べられていることが大変重要なことと思われる。

「序説」では荒牧典俊京都大学名誉教授が『大乘莊嚴經論』第十七章と第十八章に説かれる菩薩行の思想史的背景を、『十地経』「初地」から始めて『菩薩地』「旧層」「新層」を経て本論へと至る過程に位置づけるべく詳細な論述をしておられる。その冒頭に本論第十七章の「大悲」論に注目された研究者に、ハンブルク大学のシュミットハウゼン教授のお弟子M・マイトリ・マルチイ氏がおられ、この章を主題として博士論文を書かれて大著 *Wohnollen, Mitteilid, Freude und Gleichmut* を出版されていることを紹介しておられる。マイトリ・マルチイ氏は現在ハイデルベルク

大学の教授であり、本学のシヨバ・ラニ・ダシユ准教授の友人であり、女史が科研費の補助を受けて研究されている貝葉写本の協同研究者としてしばしば来校され、われわれにも馴染み深い気鋭の研究者である。

本編は(1)『大乘莊嚴經論』第十七章のサンスクリット校訂テキスト及び和訳、(2) 注解、(3) チベット訳及び漢訳テキストの三部門より成る。(1) サンスクリット校訂テキストと和訳は左右見開きに提示され、学習及び研究の便が図られている。長尾先生の『大乘莊嚴經論』和訳と註解』は適宜「長尾ノート」として(2) 注解で言及され、その書に異論や補遺のある場合はここで言及される。安慧・無性の釈疏もここで言及される。和訳と注解は次のように書名よりも多少詳しい題が附されて始まる。

Mahāvāsanūtrāṅgikārahāśya 第十七章 Pūjāsevāpāramāṇādhikāra

供養と師事(親近)と〔四〕無量(梵住)の「考察」の章

漢訳・供養品(第十八)・親近品(第十九)・梵住品(第二十)

冒頭にも述べたように筆者には翻訳の如何について論評する準備がない。それゆえここでは、本書中に主題的に取り扱われている「樹木に譬えられる悲」に関する五偈を掲示して、これからしようとする二論文の紹介を容易にする準備としたい。

この悲という大きな樹木は、最初には根があり、最後には最勝の果実がある。「すなわち、根は」悲であり、「幹は」忍耐であり、「枝は」思惟することであり、「葉は」誓願であり、「花は」生まれることであり、「そして、果実は」衆生を成熟することである。//36//

悲という根が存在しないならば、「菩薩が」難行苦行を忍耐することはありえない。「難行苦行の」苦を忍耐しないならば、智者(菩薩)は決して衆生利益を思惟することはなく。//37//

〔菩薩の〕叡智が〔衆生利益の〕思惟を欠いているならば、白淨の生に生まれようと誓願することはない。〔菩薩が〕勝れた生に到らないならば、決して衆生を成熟させることはありえない。//38//

〔1〕慈は悲〔という根〕を潤すものである。〔2〕それ〔悲〕から〔生じた〕苦において安樂があることによつて、〔忍耐という幹が〕太く成長する。〔3〕広範囲に〔思惟という〕枝が伸びることは、〔衆生利益を〕如理に思索すること〔如理作意〕によつてである。〔以上のように〕知るべきである。//39//

〔4〕〔古い誓願という〕葉をおとし〔新しい誓願という葉を〕つけるのは、〔勝れた生を得たいという〕諸の誓願の相続が断絶しないからである。〔自分自身と衆生という〕二種の縁を具足することによつて、〔5〕花も、また〔6〕それから生じる〔衆生成熟という〕果実も無駄にならないのである。//40//

本編に続いて以下のような諸氏による六編の附論が載せられ、その後に『大乘莊嚴經論』第十七章の梵和索引と要語索引とが附されて全体が構成されている。

一 『大乘莊嚴經論』ゴル寺伝存貝葉写本の翻刻

— 第五十四葉・第十七章二十七—三十九偈 — 加納和雄

二 ヴァイローチャナラクシタ作『大乘莊嚴經論』注

— 第十七章注釈箇所テキストと試訳 — 加納和雄

三 『大乘莊嚴經論』に説かれた菩薩の悲・序文 長尾雅人（大西薫訳）

四 『大乘莊嚴經論』の構成と第十七章

— 「供養・師事（親近）・無量の章」の構造 — 内藤昭文

五 『菩薩地』「供養・師事・無量の章」試訳 若原雄昭

ここで筆者が興味深く感じ紹介したいと思うのは、附論の三と四とに載せられた二つの論文である。前者は長尾先生が本論第十七章第二十九―六十四偈の「大悲」論を自らテキストを校訂し英訳し序文と注解とを附して刊行された *The Bodhisattva's Compassion Described in the Mahāyānasūtrālamkāra* の序文を大西薫氏が翻訳されたものである。先生は悲が特に選ばれ詳しく説明される理由について、注釈者が「四無量のうちもつとも重要でもつとも中心的なものだから」と述べる語を上げておられる(二五九頁)。先に挙げた「樹木に譬えられる悲」に関する五偈を先生は次のように簡潔にまとめておられる。

この譬喩では、悲の樹が語られ、悲そのものが樹の根になぞらえられている。それに水をかけるのは *rain* (慈) である。こうして、その幹、枝などが繁くすくすくと育ち、悲の樹は花開き、よい果実を実らせるのである。(二六二頁)

本論中特に注意を惹かれるのは、本来瑜伽行派の実践的側面に属していると思える悲の考察が、第三十二偈においてこの学派に特有の「不住涅槃」の理論が唐突に導入されることによつて、理論的側面である智慧との関係において説明されるに至つたとされる先生のご指摘である。先生は、智慧は賢者がそれによつてこの世界を空性すなわち「否定性」として見ることによつて涅槃に達するものであり、それゆえ向上的であり、慈悲は空性である涅槃から降りてくるので、向下的であると言われる。その「降りてくる」ことに関して、先生は説明を他の論文に譲つて、ここではただ「否定が不可思議にも肯定に転じることなのである」(二六〇頁)としか述べておられない。その論文はレスリー河村編訳の *Madhyamika and Yogācāra* 所収の *Two-Directional Activity in Buddhist Thought* とあると注記されている。

同書には The Bodhisattva Returns to this World なる論文も収められており、真宗学を専門とされる幡谷明大谷大学名誉教授が御著書『大乘至極の真宗』（方丈堂出版、二〇一三年）の中でそれに触れて、この論文を菩薩の無住処涅槃・還相廻向を『大乘莊嚴經論』等の文献に基づいて詳細に論述した貴重な業績として賞賛しておられる。真宗学に係わる研究者の間で近年還相廻向の解釈を巡って議論が起こつていると聞く。この種の議論を耳にする度に思うのは、なぜインド仏教にまで遡って検討する努力を少しはしようとしなのかという疑問である。しかし還相廻向を巡って行われる議論に参考になるようなインド仏教文献に関する研究が僅少であることも事実であり、真宗学者の怠慢を嘆き誹ってばかりもいられない。曇鸞の二種廻向の概念をインド仏教の文献学的視点から考察しようとした長尾先生の思想研究が、そしてその研究の貴重なる文献資料「長尾雅人研究ノート（3）」及びそれを発展させたこの『大乘莊嚴經論』第十七章の注釈的研究が注目される所以である。

附論四の内藤昭文氏の論文は、曇鸞の二種廻向を向上と向下の概念によって考察しようとされた長尾先生の研究の意図をよく理解し、先に引用した「樹木に譬えられる悲」に関する五偈を精確に考察しておられる。第三十七—三十八偈に説かれる樹木に譬えられる悲の成長は次のように説明されている。

菩薩自らに悲がなければ難行を堪え忍べないし、堪え忍べなければ衆生利益を思惟しない。思惟がなければ、衆生済度に相応しい清浄な「生」を願わない。願わなければ、相応しい勝れた生を受けない。その生を受けないれば、衆生を成熟することはできないという。（三〇三頁）

そして第三十九—四十偈で「慈」が「灌水（gata）」に譬えられて「慈」によって「悲」が成長する様子は次のように説明される。

根から幹が生長し、最後の果をつけるに至るまで、「根に水が灌がれること」が必要なのである。この場合、根である「悲」が成長し衆生の苦を忍受（忍辱）してこそ、衆生成熟という利他の手段を「思惟」し、その手段の

ための「願」を發し、衆生救済に相應しい「生」を受け、「衆生を成熟」するのである。その過程において、常に「灌水」に譬えられる「慈」がはたき続けてこそ、衆生を成熟することができるのである。(三〇三頁)

「相應しい勝れた生を受けない」等と説かれる「生」が菩薩が「不住涅槃」の故に生まれ変わる「生」を意味することは、四無量の異熟果を説く第二十二偈に「欲界に生まれること」が説かれることからしても明らかである。それゆえここには「悲」が首となつて菩薩の不住涅槃の実現されることが説かれているのである。このこと一つとっても長尾先生のご研究とそれを発展させた内藤氏の研究は評価に値するが、更に氏は、長尾先生が追求しようとした曇鸞の二種廻向をインド仏教にまで遡つて検討するという課題に、長尾先生が留保された「大悲の根に灌水するものが何故に慈(maitri, 長尾…慈愛)であるか」(長尾雅人研究ノート(3))一五六頁注1参照)という問題を次に引用するような第十九偈に説かれる「慈」の意味を究明することによって、それを考える方法と資料とを提示して下さつたのである。これは「本願力廻向」「如来の廻向」をインド仏教文献に遡つて考えるための貴重な資料である。

内藤氏は「大悲の根に灌水するものが何故に慈であるか」という問題を考えるために、それを菩薩ではない諸仏の慈を指すものと理解するという提案をされる。この提案は極めて貴重である。そのために氏は「慈の無縁」を説く第十九偈に戻つて考察する。そこには慈が無縁であることの四つの理由が次のように説示される。

- [1] 真如を対象としているから。
- [2] 「無生法」忍を体得することによつて清浄になるから。
- [3] 「身体と言葉の」二種の「自在の」行為があるから。
- [4] 「貪欲等の」煩惱が滅尽しているから。

この説示に対して内藤氏は違和感を覚えると言われる。氏に違和感を起こさせるものは次の三点である。第一には、第十九偈以外では主語は「慈など」であり四無量全体であるのに、この偈とその世親釈では「慈」だけであり、「な

ど」がないこと。第二には、第十七—十八偈では四無量については、衆生縁・法縁・無縁の順序で説示されているのに、第十九偈では「無縁」のみに言及すること。第三には、上記の「1」から「4」への説示が、『大乘莊嚴經論』の通常の菩薩の修習の下位から上位へではなく、上位から下位の段階への順序になっていること。

氏は違和感の原因となっているこれら三点に整合性をもたらし違和感を除去するために、第十九偈が特に「無縁の慈」を論じることは、本章第三十六—四十で展開される「樹木に譬えられる悲」と関連づけて理解すべき（二四—二五頁）ことに思い至る。つまり「灌水」に譬えられる「慈」がこの「無縁の慈の修習」を前提としていることを思いつかれた。

この着想は氏の違和感を完全に払拭したであろう。われわれにとっても「樹木に譬えられる悲」の修習が「無縁の慈の修習」を前提とするものであることが明らかにされて、菩薩が「無縁の慈」という諸仏の功德を前以て修習していたことが「灌水」として菩薩に貯えられており、それによって菩薩の修習する「悲」という樹木の根が潤され成長する、という悲の修習の次第が明らかにされる。この着想によって、第一点のここにはなぜ四無量の慈のみが説かれるのかという疑問は、仏の無縁の慈の修習が前提となっているという理由が明らかにされることによって取り除かれ、同じ理由によって第二点のここにはなぜ「無縁」の慈のみが説かれるのかという疑問も解消される。しかし第三点の説示の順序に関しては、内藤氏の説明によってわれわれの違和感が完全に払拭されたとは言えない。しかし実はここにこそ曇鸞の二種廻向をインド仏教にまで遡って検討するための文献資料を発見する可能性があるように思える。以下に氏の説明に基づきつつ、氏のお考えから外れるかも知れないが、筆者の推測をも加えて「1」から「4」への説示の順序について考えてみたい。

第十九偈及び注釈には、「2」のみは世親釈によって第八地の菩薩の階位を指すことが明らかであるが、他の三つがどの階位に相当するかは説明されない。そこで氏は菩薩の慈が無縁とされる理由を「4」から「1」へ順次検討す



ることによって、その階位を確定することを次のように想定される。

〔4〕の理由を述べる語から、この階位において菩薩が〔貪欲等の〕煩惱を対象として慈を修習することが想定される。そしてその修習の結果「煩惱が滅尽している」が故に、「滅尽」は「対象がない」「無縁」を意味するから、その修習は「無縁の慈」の修習である。それゆえそれは見道への悟入の段階に相当する階位を示すものと考えられる。

〔3〕の〔身体と言葉の〕二種の〔自在の〕行為があるからという理由からは、この階位を理解することは難しいと内藤氏は言われる。その上で氏は「煩惱のなくなった意業から生じる身業と口業は、煩惱による分別がなくなった「慈」から流出したものによって包摂されているという点で、「無縁の慈」というのだと言われる。しかしわれわれは、氏が注63にそれが「無分別智」による「法縁」の修習であることを示唆しておられることを参考に、以下のように解釈する方が理解し易いのではないかと考え試案を提示したい。つまり、この階位において菩薩は煩惱が滅尽した意業と口業を対象として慈を修習することが想定される。そしてその修習の結果、分別がなくなり〔自在の〕行為があるから、分別の「対象がない」「無縁の慈」が修習される。そしてそれは修道の段階に相当する、と。〔2〕は世親釈から第八地の菩薩の階位を指すことが判明している。〔1〕真如を対象としているから、については氏は、それは〔2〕の究極的なあり方であり、無縁の大慈を修習する「究極の菩薩」の階位を示すものと解しておられる。

(三〇六頁)

このような根気を要する詳細な検討を経て、氏は〔4〕から〔1〕の説示の方向は向上的な菩薩の修習する「慈」を意味し、〔1〕から〔4〕は向下的な菩薩の修習を意味すると結論づけておられる。そして氏は菩薩の修習する「慈」について次のような興味深いことを記しておられる。多少長くなるが示唆に富む発言なのでそのまま引用したい。

この向下的な順序は、第十九偈の「慈」が向上的に修習している菩薩自身のものではなく、その菩薩が「供養」

する諸仏の「慈」、少なくともそれらの修習の成就した「究竟の菩薩」のものであることを意味していると考えられる。というのは、「無縁の大慈」は、修習過程の菩薩ではなく、仏陀の大慈であろう。少なくとも「究竟の菩薩」であろう。したがって、この偈の意味は、「究竟の菩薩」でさえ、「供養」を通して諸仏の「慈」を蒙って波羅蜜や四無量を修習しているのであり、ましてそれ以下の菩薩は言うまでもないという意味ではなからうか。

(三〇七頁)

「4」から「1」の方向を向上的な菩薩の修習と呼び、「1」から「4」の方向を向下的な菩薩の修習と呼ぶことについて多少補足説明が必要かも知れない。「4」から「1」の方向を向上的と呼ぶことについて、「4」は見道に悟入した菩薩の階位であり、「1」は究竟の菩薩の階位であるから、それを向上的な修習と呼ぶことには問題はないように見える。他方、「1」から「4」の方向を向下的な菩薩の修習と呼ぶことは奇妙に思われる。それが奇妙でないことを説明しようとして、右に引用した文を考えられたものと思われるが、それでも内藤氏の説明は不十分であるように思える。

右に引用した文で氏は、いまわれわれが奇妙に感じた「1」から「4」の向下的な順序が、菩薩の「慈」の修習の順序を示すことを意味するものではなく、第十九偈の「慈」が向上的に修習している菩薩自身のものでなく、その菩薩が「供養」した諸仏の「慈」であることを意味している、という注目すべきことを述べておられる。つまり氏は、「1」から「4」の順序は「諸仏の慈」が向下的であることを示している、と言おうとされているのであろう。したがって樹木の根である悲を潤し育てる灌水である慈は、嘗て菩薩が供養して菩薩の中に貯えられている諸仏の無縁の大慈であり、第十九偈に説かれる菩薩の慈の修習においても、その修習を完成させるものとして、菩薩のすべての階位においてはたらくものであることを、長尾先生にならって向上的・向下的な慈のはたらきと呼ばれたものと推測する。このように推測するとき、菩薩が悲を成就して「究竟の菩薩」つまり「仏」となるために悲を潤し育てる「灌

水」として向上的な方向ではたらく「諸仏の大慈」と、菩薩が仏となったとき、下位のそれぞれの階位にいる菩薩に向かつて向下的な方向ではたらく「諸仏の大慈」との、向上・向下二種の「諸仏の大慈」のはたらきとして、「4」から「1」を向上的と呼び「1」から「4」を向下的と呼ばれた氏の意図はより明瞭に理解されるように思われる。「4」から「1」の方向こそ向上的な菩薩が修習する「慈」を意味し、「1」から「4」は向下的な順序の説示となる、と言われる氏の語をこのように理解することは、氏が次のように述べておられることともよく符合する。

菩薩自らに悲がなければ難行を堪え忍べないし、堪え忍べなければ衆生利益を思惟しない。思惟がなければ、衆生済度に相応しい清浄な「生」を願わない。願わなければ、相応しい勝れた生を受けない。その生を受けないれば、衆生を成熟することはできないという。(三〇三頁)

ここに「衆生済度に相応しい清浄な生」とか「相応しい勝れた生を受けない」等と説かれる「生」が、菩薩が「不住涅槃」の故に生まれ変わる「生」を意味することは先に述べた通りである。したがってこの「生」は「不住涅槃」によって生まれ変わる生、つまり曇鸞の言う還相の生に相当する。そしてその生が菩薩が流転輪廻の苦をも厭わず敢えて選び取った「衆生済度に相応しい」生と説かれる。それがここでは「1」から「4」に向下的と呼ばれる、菩薩の生まれ変わる、順次に下位に示される境涯への生に相当する。その生まれ変わりを實現させるものは菩薩の悲であるが、悲を潤し育てるものが「諸仏の大慈」である。ここに悲を潤し育てるものが「諸仏の大慈」とされていゝることは、廻向ということを理解する上で貴重な示唆を与える。菩薩の向上的修習が諸仏の向上的な慈によってたらされることについては既に述べた通りである。そしてここには還相の生が諸仏の向下的な慈によってもたらされることが説かれていると考えられる。それゆえ第十九偈と第三十六―四十偈に説かれていることを考え合わせれば、この章には、諸仏の大慈が菩薩に達し、それによって菩薩の悲を成長させ、次第に菩薩の行を完成に向かつて向上せしめ、その行が完成し涅槃が得られた時には、その諸仏の大慈は菩薩をそこに留まらせずに（不住涅槃）衆生済度の生

へ向下降せしめるといふ、向上・向下の二方向にはたらく諸仏の大慈が説かれていると考えられる。これらの偈をこのように解釈することが正しいとすれば、ここには曇鸞の言う往相・還相の二種の廻向がインド仏教的な形態で説かれていると考えられる。そしてその曇鸞の二種廻向にたいする理解は親鸞の次のような正像末和讃を彷彿とさせる。

往相廻向の大慈より 還相廻向の大悲をう

如来の廻向なかりせば 浄土の菩提いかがせん

曇鸞の二種廻向論が阿弥陀如来とその浄土という概念と密接に関係して構想された思想であり、それらの概念との関係の下で検討すべきものであることは言うまでもない。それゆえその二種廻向論を瑜伽行派の『大乘莊嚴經論』に説かれる菩薩の修習法のみに基づいて理解すべきでないことも言うまでもない。しかし、菩薩行の中に智慧と慈悲をどう位置づけるか、就中、仏の慈悲をどのように位置づけるかという課題がインドでも中国でも自覚され、『大乘莊嚴經論』『浄土論』を著作中の世親がそれについて抱いたと同種の構想を『浄土論』を注釈していた曇鸞が着想し、それを如来の二種廻向論へと展開したと想定することは決して無謀なことではない。そのような想定を検証する貴重な資料を提供するものとして本書を推薦したいと考え、ここに紹介の拙文を草した次第である。

能任正顕編 『大乘莊嚴經論』第XVII章の和訳と注解―供養・師事・無量とくに悲無量―

(龍谷大学仏教文化研究叢書 三〇) 自照社出版 二〇一三年

三、三三五頁(定価五、六一六円)